【資料1】

個々の主体によって主観的に認識された[現象](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E8%B1%A1)は、[幻想](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%BB%E6%83%B3)や錯誤や虚構が含まれる可能性があるため、ある種の普遍性や必然性を持つ現実とは同等ではない。とはいえ、もしこのようなそれ自体は常識的な立場を推し進めれば、ある現象を現実として認めるための根拠として、主観的な経験が役に立たないということになってしまい、一定の困難が生じる（たとえば[荘子](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%98%E5%AD%90%22%20%5Co%20%22%E8%8D%98%E5%AD%90)の「胡蝶の夢」）。また、根を同じくする問題として、「同じ現実を人々が共有している」ことをいかにして保証するかが懐疑主義的な議論においては問題となる（その根拠付けとしてのたとえば[カント](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%9E%E3%83%8C%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%AB%E3%83%B3%E3%83%88%22%20%5Co%20%22%E3%82%A4%E3%83%9E%E3%83%8C%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%82%AB%E3%83%B3%E3%83%88)の[超越論的主観性](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E8%B1%A1%E5%AD%A6#%E8%B6%85%E8%B6%8A%E8%AB%96%E7%9A%84%E4%B8%BB%E8%A6%B3%E6%80%A7)や[物自体](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%89%A9%E8%87%AA%E4%BD%93)）

（Wikipedia：現実より）<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%8F%BE%E5%AE%9F>

【資料２】

アドレリアン第6巻第1号(通巻第10号) 1992年10月　**人類の進歩**

アルフレッド・アドラー(アドラーギルド翻訳工房訳)　p41-42

（訳者不明の英訳は “The Progress of Mankind” 　in Ansbacher H.L and Ansbacher R.R “Superiority and Social Interest”）

人類の生命に内在している共同体感覚の力は、遺伝的な素質として、大部分人間の本質に由来し、それが子どもたちの創造的な力を通して、生き生きと創造的に現れいでるのである。しかし、目下の所、共同体感覚は、個人及び集団が〔それを自分たちのために私的な目的で〕拠り所にできる程度には強いのであるが、なお全人類の家族のために〔全体の〕問題を解決するほど十分には強くない。人類の判断力は、〔個人の人生として〕計画した運動の線が、最終的に社会全体の幸福に通じているかどうかを観察
〔してから実行するかどうか決定〕する程度にまでしか到達していない。政治的諸傾向、科学と技術の進歩の恩恵、法律および社会規範も、このような判断に[際しての参考資料として]含まれている。
　共同体の幸福の拠り所に関する話は、その話が〔一部の個人の幸福ではなくて〕社会全体の幸福と調和していることが確実であるときにのみ、続けて話す意味があるのである。

8.第3の予測

第3の予測は、より深刻な背景を持っているが、なお同じ結論へと導くのであって、その結論とはすなわち、人類の進歩の必然性である。その予測とはすなわち、個人の生が有限でありながら、しかも人類〔全体〕の進歩に合流するということである。人は死ぬものであり自分もまたいずれ死なねばならぬということは、われわれにとって悲劇的なことであるが、次の世代での若返りは、その前の世代を通して豊かにされ、必然的に新たな貢献と進歩となるものなのである。

さらにその若返った世代は、いまだかつて出会ったことのない、従ってこれまでの経験的な遺産のない諸問題を提起するであろうし、またそれに対処するであろう。〔いつの時代にも〕子どもと大人の創造的な力は、〔そのような諸問題に対して〕 新しい解決が発見され役に立たない解決が取り除かれるまで、常に新しい〔劣等感という〕緊張のもとで、新しい状況に繰り返し繰り返し立ち向ってゆくであろう。各々の新しい世代は、古い課題と新しい課題とを担った新しい状況と格闘するであろう。こうして彼

らは、〔彼らの世代〕全体として、〔彼らの時代の〕外界の諸問題を解決することを強いられるのである。彼らは、新しい感じ方と理解のし方でもって、身体的にも精神的にも、自分たちのホメオスターシスを保つことを強いられるのである(Cannon)。このホメオスターシスに到達できるのは、合理的な世界像の発達を通じて個々人のエネルギーが集積され、その集積が、外界〔の諸問題〕と彼ら自身の課題を『成功的に』解決に導くときだけなのである。進歩が、人類家族の滅亡に至るまで、人と宇宙との全体的関係を支配する。「環境が人間をつくり、人間が環境をつくる」(Pestalozzi)のである。最終的な結論についてはわれわれの感覚と理解力には限界があるが、その限界の中での最良の結論を、合理的な科学が語るのである。それゆえここに、個人心理学は、その全体性と共同体感覚の強調でもって、力強い言葉を語らねばならない。

evolution： ラテン語が語源「（巻物などを）開くこと」の意

progress：【類語】 progress はある[目標](https://ejje.weblio.jp/content/%E7%9B%AE%E6%A8%99%22%20%5Co%20%22%E7%9B%AE%E6%A8%99%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E)・[方向に向かって](https://ejje.weblio.jp/content/%E6%96%B9%E5%90%91%E3%81%AB%E5%90%91%E3%81%8B%E3%81%A3%E3%81%A6)[絶え間なく](https://ejje.weblio.jp/content/%E7%B5%B6%E3%81%88%E9%96%93%E3%81%AA%E3%81%8F)[進んでいく](https://ejje.weblio.jp/content/%E9%80%B2%E3%82%93%E3%81%A7%E3%81%84%E3%81%8F)[進歩](https://ejje.weblio.jp/content/%E9%80%B2%E6%AD%A9); [advance](https://ejje.weblio.jp/content/advance) は[レベル](https://ejje.weblio.jp/content/%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB%22%20%5Co%20%22%E3%83%AC%E3%83%99%E3%83%AB%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E)が[高](https://ejje.weblio.jp/content/%E9%AB%98)[まってい](https://ejje.weblio.jp/content/%E3%81%BE%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84)く[進歩](https://ejje.weblio.jp/content/%E9%80%B2%E6%AD%A9); [development](https://ejje.weblio.jp/content/development) は[あるもの](https://ejje.weblio.jp/content/%E3%81%82%E3%82%8B%E3%82%82%E3%81%AE%22%20%5Co%20%22%E3%81%82%E3%82%8B%E3%82%82%E3%81%AE%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E)が[本質的に](https://ejje.weblio.jp/content/%E6%9C%AC%E8%B3%AA%E7%9A%84%E3%81%AB)[もっている](https://ejje.weblio.jp/content/%E3%82%82%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%82%8B)[特質](https://ejje.weblio.jp/content/%E7%89%B9%E8%B3%AA)などが[高](https://ejje.weblio.jp/content/%E9%AB%98)[まってい](https://ejje.weblio.jp/content/%E3%81%BE%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84)[くよう](https://ejje.weblio.jp/content/%E3%81%8F%E3%82%88%E3%81%86)な[進歩](https://ejje.weblio.jp/content/%E9%80%B2%E6%AD%A9)》.

（weblio 辞書より）

【資料３】

**生存圏**（せいぞんけん、[ドイツ語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E8%AA%9E): Lebensraum、レーベンスラウム）とは、[地政学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%B0%E6%94%BF%E5%AD%A6%22%20%5Co%20%22%E5%9C%B0%E6%94%BF%E5%AD%A6)の[用語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%A8%E8%AA%9E)であり、[国家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%AE%B6)が[自給自足](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E7%B5%A6%E8%87%AA%E8%B6%B3)を行うために必要な、政治的支配が及ぶ[領土](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A0%98%E5%9C%9F)を指す。日本語では**生空間**とも訳される

生存圏とは[国家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%AE%B6%22%20%5Co%20%22%E5%9B%BD%E5%AE%B6)にとって生存（自給自足）のために必要な地域とされており、その範囲は[国境](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%A2%83%22%20%5Co%20%22%E5%9B%BD%E5%A2%83)によって区分されると考えられている。ただし国家の[人口](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%BA%E5%8F%A3)など[国力](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%8A%9B)が充足してくれば、より多くの資源が必要となり、生存圏は拡張すると考えられ、またその拡張は[国家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%AE%B6)の[権利](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%A9%E5%88%A9)であるとされている。また生存圏の外側により高度な[国家](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%AE%B6)の発展に必要な、経済的支配（必ずしも政治的支配が必要ではない）を及ばせるべきとされる領土を「[総合地域](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E7%B7%8F%E5%90%88%E5%9C%B0%E5%9F%9F&action=edit&redlink=1" \o "総合地域 (存在しないページ))」と理論上設定している。近年[経済](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B5%8C%E6%B8%88)の国際化が進んでおり、自給自足の概念は重視されなくなったため、生存圏理論を国家[戦略](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%88%A6%E7%95%A5)に反映させることはなくなっている。

**生存圏**という言葉は、[国家社会主義ドイツ労働者党](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%BD%E5%AE%B6%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E5%8A%B4%E5%83%8D%E8%80%85%E5%85%9A)（ナチス）党首[アドルフ・ヒトラー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%89%E3%83%AB%E3%83%95%E3%83%BB%E3%83%92%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%BC%22%20%5Co%20%22%E3%82%A2%E3%83%89%E3%83%AB%E3%83%95%E3%83%BB%E3%83%92%E3%83%88%E3%83%A9%E3%83%BC)著書の「[我が闘争](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%88%91%E3%81%8C%E9%97%98%E4%BA%89)」の中で言及された。

Wikipedia：生存圏https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%9F%E5%AD%98%E5%9C%8F#:~:text=%E7%94%9F%E5%AD%98%E5%9C%8F%EF%BC%88%E3%81%9B%E3%81%84%E3%81%9E%E3%82%93,%E7%A9%BA%E9%96%93%E3%81%A8%E3%82%82%E8%A8%B3%E3%81%95%E3%82%8C%E3%82%8B%E3%80%82

【資料４】

**野田俊作の補正項**

目的を意識すれば神経症から抜け出せる2009年06月13日（土）

社会構築主義 social constractionism があらわれたとき、アドラー派の学者たちはびっくりしてしまった。彼ら（たとえばナラティブ・セラピスト）が、「すべての現実は物語であり、その他に事実など存在しない」と言ったからだ。アドレリアンも、「すべての現実は物語である」ことは認めるが、「物語（＝現実）とは別に事実が存在する」とも思っている。アドラー自身はカント主義者だったので、人間は《事実そのもの》Ding an sich を知ることはできないと考えていたが、しかし事実が存在しないわけではないと考えていた。私の先生のシャルマンなどは現象学者だったので、《事実そのもの》をカッコ入れして、存在を肯定もせず否定もせず話をしていたが、《共主観性》intersubjectivity ということを根拠にして、人間が共通認識ができる以上は《事実そのもの》の存在を否定する根拠はないと考えていた。私は構造主義者なので、われわれが世界を言語でもって恣意的に切り取って現実を作りだしていると思うが、その一方で、国語が通じあうのだから、同じ国語を共有する人たちの間で共通認識が成り立ち、そのうちのあるものを《事実》という名前で呼んでかまわないと考えている。ともあれ、アドレリアンたちはたくさんの論文を書いて話し合い、結局、極端な社会構築主義は拒否して、何らかの形で事実は存在すると考える立場に落ちついた。たしかに、事実そのものではなくて、事実に対する解釈が、人間行動を決めると思う。別の言い方をすると、物語が人間精神に大きな影響を与えて、それによって歴史が作られていく。しかし、それにもかかわらず、事実にもとづく物語もあるし、事実にもとづかない物語もある。

**日本アドラー心理学会２日目**　2006年10月21日（土）

私がレヴィナスにたどりつくまでは、思い起こしてみると、長い道のりだったと思う。学生時代は現象学・実存主義の全盛期だったし、師匠のシャルマンも現象学的精神医学の論客だった。現象学はたしかに素敵だ。非現象学的なフロイトの『ヒステリー研究』と現象学的なビンスワンガーの『精神分裂病』を読み較べてみると、フロイトの場合には、患者の叙述と治療者の主観とが区別されないでダラダラと書かれているので、患者になにが起こっているのか、読者にはさっぱりわからないのに対して、ビンスワンガーが《現象学的エポケー》を意識して、自分の解釈をすべて《かっこ入れ》して書いた記述からは、患者の様子がありありと浮かび出てくる。これはすごいことだ。

【資料５】

Superiority and Social Interest,p59-62

**The Forms of Psychological Activity**(1933)

Individual Psychology endeavors to obtain an idea of an individual as a whole from his attitude to the problems of life, problems which are always social in nature. In doing so it emphasizes among other individual tackles his problems. Some time ago I explained such facts important facts particularly the degree of activity with which the as the hesitating attitude, self-blockade, detours, narrowed sudden spurts with subsequent sluggishness, and the jumping from one task to another as typical forms of failure? when the ability to cooperate is reduced. I also noted that each of these erroneous gaitsi their thousandfold variations shows a lesser or greater degree of activity. This varying degree of activity is produced by the personality in earliest childhood with a certain arbitrariness, wherein, however, hereditary and environmental factors play a part, certainly not causally, but in the sense of a probability.

個人心理学は、人生の問題、つまり常に社会的な性質をもつ問題に対する個人の態度から、全体としての個人の考えを得ようとするものである。その際、特に個人の問題に取り組むことを強調する。少し前に、私はそのような事実の重要な事実を説明しました特に、失敗の典型的な形態として、躊躇する態度、自己遮断、回り道、その後の低迷と狭く突然のスパート、および1つのタスクから別のタスクへのジャンプとして、活動の程度？また、これらの誤った歩行やその千変万化は、それぞれ活動の度合いが小さかったり大きかったりすることも指摘した。しかし、そこには遺伝的な要因と環境的な要因が、因果関係ではなく、確率的な意味で関わっているのである。

Individual Psychology is also in the position to observe that the degree of activity acquired in childhood remains constant for the rest of life. We have also clearly pointed out that this fact remains, although in many cases the constant degree becomes only conditionally apparent, e.g., when the individual is in favorable or unfavorable situations.

個人心理学は、幼少期に獲得した活動の程度が、その後の人生において一定であることを観察する立場にもあります。また、この事実は、多くの場合、個人が有利な状況や不利な状況にあるときなど、一定の程度が条件付きで明らかになるだけで、残ることも明確に指摘してきた。

Although it is probably not possible to express the degree of activity in quantitative terms, it is obvious that a child who runs away from his parents, or a boy who starts a fight in the street, must be credited with a higher degree of activity than a child who likes to sit at home and read a book.

活動の度合いを定量的に表すことはできないだろうが、家でじっと本を読むのが好きな子供よりも、親から逃げ出したり、道で喧嘩をしたりする子供の方が、活動の度合いが高いと評価されなければならないのは明らかである。

I must emphasize that activity should not be confused with courage, although there is no courage without activity. But only the activity of an individual who plays the game, cooperates, and shares in life can be designated as courage. When courage has been observed, one should not forget the numerous variations and mixed cases, as well as those persons in whom courage appears only conditionally, e.g., in an extreme emergency or with the help of others.

活動なくして勇気はありえないが、活動を勇気と混同してはならないことを強調しておかなければならない。しかし、ゲームをし、協力し、人生を共有する個人の活動だけが、勇気と指定されることができる。勇気が観察されるとき、多くのバリエーションや混合例があること、また、勇気が極度の緊急事態や他人の助けによってのみ、条件付きで現れる人がいることを忘れてはならない。

Anyone who has become convinced of the constancy of the degreeof activity, corresponding entirely to the constancy of the individual law of movement, i.e. the style of life, will give the greatest attention to observing that individual degree of activity. The appreciation of this problem opens an entirely new and valuable perspective for psychiatric treatment, education, and prophylaxis. For our observation shows that from the smallest traits and expressive movements of childhood we can predict the degree of activity with which this child will some day later face the problems of life.

個々の運動法則、すなわち生活様式の不変性に完全に対応する活動度の不変性を確信した者は、その個々の活動度を観察することに最大の注意を払うことになる。この問題を理解することは、精神医学の治療、教育、予防にまったく新しい貴重な展望を開くことになる。なぜなら、我々の観察によれば、幼年期の最も小さな特徴や表現的な動きから、この子供がいつか人生の問題に直面するときの活動度を予測することができるからである。

Although valuable, such a perspective would be practically incomplete unless we connected it with a further observation of Individual Psychology, the constancy of social interest in a given case, which is also proven. Only the combination of both, in which the degree of ability to cooperate gives the direction, permits us to predict if there is the danger of a failure and what kind of failure it would be.

しかし、このような視点は、個人心理学のさらなる観察である、与えられたケースにおける社会的関心の不変性（これも証明されている）と結びつけなければ、事実上不完全なものとなってしまう。協力する能力の程度が方向性を与える両者の組み合わせのみが、失敗の危険性の有無と、それがどのような失敗であるかを予測することを可能にするのである。

But one must keep in mind that a failure becomes apparent only in the face of a difficult problem; quite generally speaking, on the occasion of an exogenous difficulty under unfavorable conditions.

There are a great many such unfavorable conditions. But one may not use an objective measure, and one must be aware of the frequent erroneous overestimation of difficulty. Quite generally, tasks of all kinds appear more difficult to the person who has the greater inferiority feeling.

しかし、失敗が明らかになるのは、困難な問題に直面したとき、ごく一般的に言えば、不利な条件下で外生的な困難が発生したときであることを心に留めておく必要がある。

そのような不利な条件というのは、非常にたくさんある。しかし、客観的な尺度は使えないし、難易度を誤って過大評価することも多いので注意しなければならない。ごく一般的に、あらゆる種類の課題は、劣等感が強い人ほど難しく見える。

To this must be added the fact that each individual form of life is incompatible with tasks which contradict the aspired goal of perfection. If the life style of an individual is more or less oriented toward the goal of being under all circumstances the first, insurmountable situations will be automatically excluded, and this exclusion will always be affectively toned. If, in another case, the goal of superiority is sought in the depreciation of others, then the life space will correspond to this constant irrefutable demand. If someone always aims only to avoid the disclosure of his presumed worthlessness, then he will arrange his thoughts, feelings, and attitudes so as to leave all problems unsolved, in order thus to have at least the appearance and possibility of a superiority in reserve. If one is a real co-worker, this will become the guiding line of his life and will permeate the approach to all tasks.

これに加えて、個々の生活形態は、完璧を目指すという目標に反する仕事とは相容れないという事実がある。もし個人の生活様式が、多かれ少なかれ、どんな状況でも最初のものであるという目標に向いているならば、乗り越えられない状況は自動的に除外され、この除外は常に感情的に調子を合わせることになる。別のケースでは、優越性の目標は、他人の減価に求められている場合、生活空間は、この一定の反論できない要求に対応することになります。もし誰かが常に、自分が無価値であると推定されることの暴露を避けることだけを目的とするなら、その人は自分の思考、感情、態度を、すべての問題を未解決のままにして、少なくとも優越性の外観と可能性を留保するように整えるだろう。もし人が真の協力者であるならば、このことが彼の人生の指針となり、すべての仕事への取り組みに浸透していくだろう。

In all these cases, with their millions of variations, a uniform kind of activity can always be observed. As a rule, one will be able to perceive the degree of activity also from the extent of the sphere of activity, which is different for each individual. It would be a tempting task for a psychologist to show graphically the extent and form of the individual life space.

このように、何百万通りものバリエーションを持つすべてのケースで、常に一様な種類の活動を観察することができます。原則として、人は活動の程度を、個人ごとに異なる活動範囲の広さからも感知することができるだろう。心理学者にとって、個人の生活空間の広さと形態を図式化することは、魅力的な仕事であろう。

**クルト・レヴィン**（Kurt Zadek Lewin, [1890年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1890%E5%B9%B4)[9月9日](https://ja.wikipedia.org/wiki/9%E6%9C%889%E6%97%A5) - [1947年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1947%E5%B9%B4)[2月12日](https://ja.wikipedia.org/wiki/2%E6%9C%8812%E6%97%A5)）



[心理学者](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6%E8%80%85)。専門は[社会心理学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6)、[産業・組織心理学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%A3%E6%A5%AD%E3%83%BB%E7%B5%84%E7%B9%94%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6)、[応用心理学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BF%9C%E7%94%A8%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6)。 [ドイツ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84)のモギルノ(Mogilno) (現在は[ポーランド](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%22%20%5Co%20%22%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89)領) 生まれで[ユダヤ系](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%80%E3%83%A4%E7%B3%BB%22%20%5Co%20%22%E3%83%A6%E3%83%80%E3%83%A4%E7%B3%BB)。 「[ツァイガルニク効果](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%84%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%82%AC%E3%83%AB%E3%83%8B%E3%82%AF%E5%8A%B9%E6%9E%9C%22%20%5Co%20%22%E3%83%84%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%82%AC%E3%83%AB%E3%83%8B%E3%82%AF%E5%8A%B9%E6%9E%9C)」の研究や「[境界人](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9D%92%E5%B9%B4%E6%9C%9F)」の概念の提唱で知られる。

![[Kurt Lewin]のA Dynamic Theory of Personality - Selected Papers (English Edition)]()[ゲシュタルト心理学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B2%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%83%88%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6)を[社会心理学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6)に応用し[トポロジー心理学](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%88%E3%83%9D%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%83%BC%E5%BF%83%E7%90%86%E5%AD%A6&action=edit&redlink=1)を提唱した。ベルリン大学の哲学と心理学の教授を務めていたが、[ナチ党の権力掌握](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%83%81%E5%85%9A%E3%81%AE%E6%A8%A9%E5%8A%9B%E6%8E%8C%E6%8F%A1)で、ユダヤ人の学者は大学から追放された。海外に出ていた彼は、1933年8月に[アメリカ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%88%E8%A1%86%E5%9B%BD%22%20%5Co%20%22%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%88%E8%A1%86%E5%9B%BD)に亡命し、1940年にアメリカの市民権を取得した。[コーネル大学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%8D%E3%83%AB%E5%A4%A7%E5%AD%A6%22%20%5Co%20%22%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%8D%E3%83%AB%E5%A4%A7%E5%AD%A6)教授をつとめ、[マサチューセッツ工科大学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%82%B5%E3%83%81%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%BB%E3%83%83%E3%83%84%E5%B7%A5%E7%A7%91%E5%A4%A7%E5%AD%A6)（MIT）にグループダイナミクス（集団力学）研究所を創設した。「社会心理学の父」と呼ばれ、アイオワ大学の博士課程で[レオン・フェスティンガー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A7%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%BC%22%20%5Co%20%22%E3%83%AC%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A7%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%BC)などを指導した。リーダーシップスタイル（専制型、民主型、放任型）とその影響の研究、集団での意思決定の研究、場の理論や変革マネジメントの「解凍―変化―再凍結」モデルの考案、「[アクション・リサーチ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%81%22%20%5Co%20%22%E3%82%A2%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%82%B5%E3%83%BC%E3%83%81)」という研究方式、グループダイナミクスによる訓練方法（特にTグループ）など、その業績は多方面にわたる。

（Wikipedia：クルト・レヴィンより）<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AB%E3%83%88%E3%83%BB%E3%83%AC%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%83%B3>

参考：大竹優子http://adler.cside.com/sicher/ref\_20210909.pdf

**K.レヴィン (Kurt Lewin)**[発達論の研究者](http://rinnsyou.com/archives/category/0500developmental/0501kiso)

　グループ・ダイナミクス研究を中核に社会心理学の発展に寄与した人物です。青年心理学あるいは発達心理学を専門とはしていないものの、彼の提唱した「境界人」の概念は青年心理学の本質を理解する上で1つの重要な視点となりました。

**境界人（周辺人） (marginal man)**

　文化の異なる複数の集団に属し、そのいずれにも完全には所属することができず、それぞれの集団の境界にいる人をいいます。
　青年は、子どもから大人へと成長する半ばで、生活空間の構造が、生理的、心理的、社会的いずれの面でも急速に変容していく時期です。集団の所属性が流動的で生活空間の領域ごとの行動も可能性が開かれていきます。一方で可能であったことが許されなくなりもします。
　このような特徴を持つ青年期を説明するのに境界人の概念は有効であるとされます。
　青年期にみられる、攻撃性・過敏性・羞恥・激情・自己嫌悪・感情の起伏の激しさなどは、未知の世界への関心の増大として理解されます。

[臨床心理学用語事典](http://rinnsyou.com/) http://rinnsyou.com/archives/842

**IPAA　 INTRODUCTION　 p12-13**

3. FIELD THEORY（場の理論）

A special aspect of Gestalt psychology is the field theory of Lewin, The parallels between Lewin and Adler are particularly marked. Lewin is said to have once characterized the position of Gestalt psychology "as having confirmed experimentally the correctness of the Adlerian views” (87), and in fact his studies on level of aspiration are an example of such a confirmation.

ゲシュタルト心理学の特殊な側面として、Lewinの場の理論がある。とアドラーの類似性は特に顕著である。Lewinはかつてゲシュタルト心理学の立場を「アドラー的見解の正しさを実験的に確認した」（87）と評していますが、実際、彼の願望水準に関する研究はそのような確認の一例と言えるでしょう。

In the present connection we shall limit ourselves to the brief discus. sion of two fundamental similarities of theory. The first is the rejection of fixed class concepts. In his first book, published in 1912, Adler took a stand against Aristotelian class concepts and against all dichotomies as doing violence to the facts. He showed that categorical and dichotomized thinking is characteristic of the primitive mind and of the neurotic in his prejudiced mode of apperception and greater need for security. It was in accordance with this denial of specific categories that Adler also denied the existence of specific mental diseases as such, and stressed the unity of the neuroses (1912a). This rejection of categories was later worked out in much greater detail by Lewin in his important paper on Aristotelian and Galilean modes of thought, in which he described the process of progressive homogenization, that is, the doing away with rigid classes and antitheses, which has been found to accompany the advance of scientific theorizing (67).

ここでは、理論の2つの基本的な共通点について、簡単に説明することにとどめる。第一は、固定的な階級概念の否定である。1912年に出版された最初の本で、アドラーはアリストテレスの階級概念に反対し、すべての二項対立が事実に暴力をふるうとして反対する立場をとっている。彼は、類別的で二項対立的な思考は、原始的な心や、偏った認識様式と安全への大きな欲求を持つ神経症の特徴であることを示しました。アドラーが特定の精神疾患の存在を否定し、神経症の統一性を強調したのも、この特定のカテゴリーの否定に従ったものであった(1912a)。このカテゴリーの否定は、後にLewinがアリストテレス的、ガリレオ的思考様式に関する重要な論文で、より詳細に説明した。この論文では、科学的理論化の進展に伴って見られる均質化の進行過程、つまり、硬いクラスやアンチテーゼを取り去る過程について述べている（67）。

Adler believed that different parts of life are made entities artificially by giving them more or less adequate man-made names (1937a). He had a profound distrust of incisive terminology and therefore kept his technical terminology to a minimum. This is quite in contrast to the way of a categorizing mind like that of Freud, who built up a rich terminology to express a highly ramified theory. Categories and terms are familiarly the delight of the pedant, and the class theorist has the advantage over the field theorist in that he appears to give more, and more definite, information.

アドラーは、生命のさまざまな部分は、多かれ少なかれ適切な人工的な名前をつけることによって、人為的に実体化されると考えていた（1937a）。彼は切実な専門用語に深い不信感を抱いていたため、専門用語は最小限にとどめていた。これは、フロイトのような類型化思考が、高度に飛躍した理論を表現するために豊富な専門用語を構築していったのとは全く対照的である。カテゴリーや用語は、衒学者の楽しみであり、階級理論家は、より多くの、より明確な情報を与えるように見えるという点で、分野理論家より有利である。

the pedant (過度にまた不適切に学識をひけらかす)学者ぶる人，衒学(げんがく)者. ... (教育で)ささいな規則を強調する人，杓子定規な人

Secondly, and related to the first point, Lewin and Adler both consider dynamic forces not as fixed and absolute quantities of energy, but as forces which can be expressed only in relational terms. Thus we find Adler recurrently speaking of “movement,” a term which has much the same significance as Lewin's "vector," namely the expression of a force directed from one point to another. In accordance with the nature and properties of movement, Adler was more interested in describing its direction than in giving it a definite name. As a result he was fluid and elastic in his terms referring to dynamics. For example, he referred to his basic dynamic force variously as the striving for superiority, for overcoming, for completion, for totality, from below to above, for self-enhancement, of which terms none was to be taken literally. Wherever he uses a dynamic name it is safe to say that it is to be taken as a tentative proposal for describing a vector.

第二に、第一の点とも関連するが、Lewinとアドラーはともに、動力を固定的で絶対的なエネルギー量としてではなく、関係性の用語でのみ表現できる力として考えている。この言葉は、Lewinの「ベクトル」とほぼ同じ意味を持っており、ある点から別の点へ向けられる力の表現である。アドラーは、運動の性質と特性に従って、運動に明確な名前をつけることよりも、その方向を説明することに関心を寄せていました。その結果、彼は力学に言及する用語において、流動的で弾力的であった。たとえば、彼は基本的な動きの力を、優位への努力、克服への努力、完成への努力、全体性への努力、下から上への努力、自己強化の努力とさまざまに呼んだが、これらの用語はどれも文字通りに解釈してはならないものだった。彼がダイナミックな名称を使う場合、それはベクトルを説明するための暫定的な提案として受け止められていると言ってよいだろう。

On the basis of such theoretical accord and certain similar developments therefrom, some of which are mentioned below (see pp. 245 and 344), we believe that the understanding of Adler is greatly facilitated if he is regarded as the original field theorist in the area of modern dynamic psychology.

このような理論的一致と、そこから派生したある種の類似の発展に基づいて、アドラーを現代のダイナミック心理学の領域における最初の場の理論家とみなすと、彼の理解が大きく促進されると考える（245ページと344ページ参照）。